

剣の四君子

林崎甚助

吉川英治

青空文庫

母のすがたを見ると、甚助じんすけの眼はひとりでに熱くなった。

世の中でいちばん不倖ふしあわせな人が、母の姿であるように見られた。

「どうしたら母は楽しむだろうか」

物心のつき初そめた頃から、甚助はそんな考えを幼おさなごころ心にも持った。

ふと、何かの弾はずみに、その淋しい母が、笑うかのような齒くちを唇くちにこぼすと、

「母上がお笑いになった」

と、その日は一日、彼も楽しく遊ぶことができた。

十二、三歳になると、そんな考えがもつと深くなつて、

「なぜだろ？」

と、思うようになった。

自分が何をした時に、母の顔が欣しうれそうになるか、に気がつきだした。

「書ほんが好く読めた時と、長柄ながえの刀で、樹がよく斬れた時だ」

少年林崎甚助は、それからよけい声を張つて良く書を読み、外へ出ては、身丈に過ぎた長巻刀ながまきを把とつて、丈余の樹の梢こずえを、跳び斬りに斬つて落した。

古い土堀門の外に佇たつて、母は時折、微笑んでくれた。

その母は、またなく美しい人だった。年もまだ若かった。名は
にれは 榦葉は といつた。

榦葉は若後家であつた。祖先からの土豪造りの家は、羽前の

大川たいせんもがみ 最上の流れに沿い、甑こしきだけ 嶽ふもと の麓にあつた。山形から十里

余、たておか 楯岡とりで の砦から北へ一里、土称どしよう 林崎という部落にあつた。

けん この地方一帯は、足利家の管領斯波しば 氏のわかれ最上一族の勢力
 圈内であつた。甚助の父も、最上家の臣だつた。

上杉謙信の越後本庄から最上川を溯さかのぼ れば、最上領東根ひがしね の砦とりで

町まち、また、黒伏嶽くろふせだけ や高倉の山道を越えれば、一路伊達家の仙

台に通じる。武強の隣藩と境を接して、連年、ここにも戦乱は絶

えなかつた。

甚助は信じていた。

「わしの父者人は、戦で死んだのだ」

それは、父なき少年の、せめてもの誇りでもあつた。

ところが或る時、楯岡の砦町から部落へ来た馬商人の曳

て来た馬へ、甚助が他の少年たちと共に、悪戯すると、その中

の一人の馬商人が、拳を振上げて、逃げおくれた甚助のうしろか

らこう呶鳴つた。

「この童めツ。そげな悪性な真似しさらすと、汝れが父者

のように、汝れも今に、闇討ち食つてくたばりさらすぞ」

その声は、甚助の耳より魂をつき破つた。甚助は、色あおざめ

て逃げて来た。それからもう他ほかの子と遊ばなくなつた。

二

長柄ながえという武器は、戦時の用具である。平時の刀では短きに過ぎるので、いざという場合、常の刀へ、常用の柄つかより寸法の長い特殊な柄をすげ替えて、これを引さつ提もげ持ちにして、戦場へ働ききに出るのである。

別名、長巻とも称よんでいる。

その寸法は、およそ三尺の刀身なかみへ、二尺二、三寸の柄をつける。三尺以上の刀になれば、それに三尺もある長柄をすげる場合もあ

る。

林崎甚助は、天文十六年の生れで、その年少十四、五歳の頃は、ちようど永祿年間に当り、戦国の英雄が諸州に覇はを興おこした頃であったから、長柄の流行は、旺さかんを極めて、戦場ばかりでなく、平時でも引つ提げて歩く者があつた。

織田信長は、その頃、自己の歩兵隊に、刀の長サ三尺、柄四尺という長柄を揃えて持たせて、敵陣へ突とつ貫かんさせて、いつも敵の一陣を縦じゆう横おう刺撃しげきして駈くずけ崩したということである。もつとも、それから間もなく鉄砲が渡来して全国に行き互わたつたので、後には、第一陣鉄砲隊、第二陣長柄隊というふうに、戦術の編制は變つて来たが、とにかく甚助の少年頃には、ふと物置小屋を覗のぞいても、

長柄の錆びたのが一本や二本は転がっている程だった。それほど普及された兵具であつた。

薪切りまきに、甚助が持ち馴れたのも、父の代に、戦場から束にして分捕つて来た物のような中の一本であつた。

それも、何のためか知らないが、母の榆葉にれはから、

「枯れ木を拾うは百姓の子ぞ、そなたは、梢こずえの木を、長柄で伐おろして来やれ。長柄も背丈も届かぬ梢も、心して跳んで伐きつて見やい。それしきもの斬れねば、殿様の御馬前に立つて、戦いくさの場にわで人勝りの働きはならぬぞい」

と、云い聞かされて、七ツ八歳頃やつからし始めたことであつた。

雨さえ降らなければ、日課のように、

「甚助。薪を伐^{まき}ろして来やい」

母は、いいつけた。

よく斬れると、遠くで、見ている母が微笑んでくれる。それが欣^{うれ}しさに、甚助は、高い樹へ、高い樹へと、次第に望みを大きく育てて、長柄を小脇に、仰いで迫った。

三

大同年間からあるという部落でいちばん古い杉木立がある。そこに熊野神社が祀^{まつ}つてあつた。部落の名をそのまま林崎明神ともよんでいる。

禰宜ねぎの山辺守人やまのべもりとは、時ほととぎす鳥ぶつぼうそうや仏法僧なぎねの啼音なきねばかりを友として、お宮の脇の小さい社家に住んでいたが、甚助の姿が見える
と、かたこと木履ぼくりの足音をさせて出て来た。

麦餅あむや、麴こうじあめ飴あめなどつつんで、

「甚助、菓子やろう」

と寄つて来る。そして甚助の、鳥の巢のような頭を撫でて、一話しするのが、禰宜の守人にとっては、一日のうちで、人間と話を
する唯一な時間ひのようであった。

ところが、その日ひに限つて、甚助は、

「お菓子、要らない」

と、首をふつて、守人をいぶからせた。

「喰べたくない」

と重ねて云うのである。

長柄を横に置いて、朽くちた鳥居とりいの下に腰をおろし、眼すら、ぽつねんと、雲へやって、菓子を見ないのであつた。

「そうかい」

守人は、強しいなかつた。

顔をのぞいて訊ねた。

「甚助。どうかしたのか。この頃は、樹の梢へかかつて、見事に枝を伐おろす姿も、ちつとも見かけないが」

「おじさん、どうしたんだろ」

「わしが訊いてるのだよ。どうかしたのかと」

「おらにも分らない。——この頃は、いくら樹へかかっても、今までは切れたぐらいな高さの梢も、急に斬れなくなつてしまった」

「それはふしぎだな」

「だから、もう、樹を伐るのは、嫌いやになつた。……だけど、伐きつて見せないとおつ母さんが、笑つてくれない」

「甚助、おぬしももう、十四だな。この頃は、よその子とも、遊ばぬのう」

「つまらないもの」

「考え事が胸にでき宿やどり始めたのじやろ。何か、人にも云えぬ考え事が」

「ああ、無いこともない」

「そのためだ。わしに話してごらん」

「神かんぬし主さん」

甚助は、ふいに立って、守人もりとの胸へ、抱きついた。しゆくしゆく泣き出したのである。

「なんだ、なんだ、男のくせに」

「おらの……おらのお父さんは、戦いくさで死んだのじゃないのかい。

神主さんは、年老とっているから、おらが嬰あかこ児の時分のことでも知っているだろ。話して、話して。よう、誰にもいわないから、俺にだけほんとのことを話してよう……」

守人も、眼を上げていた。

麦がよく伸びる頃の昼間の月に、禽とりの音が澄んでいた。

四

禰宜ねぎの守人もりとに連れられて、甚助は、家へ戻った。

守人から何か聞くと、彼の母は、いつにない改まった眼で、わが子を見、

「口を嗽すすぎなさい。手を洗っておいでなさい。そして、お仏間へ来るがよい」

と、云った。

甚助は、云われた通り、身躰みだしなみを作つて、後から仏間へ行つてみると、母と守人が寂じやくとして坐つていた。

御先祖の壇には、御みあかし灯があがつていた。

「きよう初めてはなすが、真まことは、其方そなたの父は、人手にかかつてお果てなされたのです」

母は、水のような声で、子に告げた。泣いてもいなかつた。しかし、泣いている以上なものを、甚助は、その母の眼に見た。

それきり多くを母自身は語らなかつた。

若くて美しかつたその頃の彼女自身が、良人の横死の一原因であつたせいもあるう。

が、あらましは、事情に詳くわしい守人もりとが、噛かんで啣くめるように聞かせてくれた。甚助が生れたその年のことだというから、天文十六年のことにちがいない。

坂上主膳さかがみしゆぜんという武士のために、楯岡たておかの藩祖ぼだいじの菩提寺ぼだいじのすこし下手町しもの辻で斬られたのであつた。原因いしゆは意趣いしゆ、その詳つまびらかな事實は、おまえがもつと大人になれば自然分つてくる。母御もまた、話す折があらうと、守人は云つた。

「わかつたか」

「わかりました」

甚助は、そこでは泣かなかつた。

青白い栗の花が咲うまやいている厩たたずの横たたずに佇たたずんで、独り眼を横たたずにこすつていた。父の林崎重成しげなりが乗用したという馬も老いて、数年前に死んでいた。

五

元服したばかりの十五の甚助は、ひたむきに、何ものかを求めて、旅へ立った。

勿論、母のゆるしを得て。

世間も知らないそんな若冠じゃっかんの子を遠くへ見送るのに、当時

の若い母親は健気けなげであつた。しかも戦乱に次ぐ戦乱の世であつた。

その年はちようど川中島かわなかじまの大戦の翌年であつた。

「大胡おおむのお城はどこですか」

上州へ来た甚助は、その城主、上泉伊勢守秀綱かみいずみいせのかみひでつなをさが

した。

「お城はないよ」

土地の者は云った。

「伊勢守様も、もう都の空だよ。大胡城は去年、上杉勢に攻め落されて、石垣と焼け木杭しか残っていない。そこに今あるのは、上杉家の侍衆のお陣屋さ」

こう聞いて、甚助は空しく、常陸国へ志した。大永年間の人で、鹿島神流の中興の祖松本備前守を初めとして、天真正伝神流の開祖、飯篠長威斎もすでに遠い古人であるが、常陸の産であると聞いている。近くは、土地の土豪、塚原土佐守ト伝が、そこに住んでいると聞いている。

だが、訪ねて行ってみると、そのト伝も、

「御遊歴中」

とて、留守であつた。

戦雲の世には、人も雲のように、諸国を去来していた。武芸者はわけても旅が生活だつた。修行は遍歴にあつた。

伊勢守秀綱とか、土佐守ト伝とかは、たとえ野やに在つても、土地の豪族なので、弟子郎党など四、五十人も召連れて、小姓こぶしの拳こぶしに鷹をすえさせ、乗更のりかえうま馬うまなど美々しく曳ひかせて遊歴した。

しかし、笠一つ、劍一腰で、時雨しぐれに会つても、乾ほす着更きがえさえも持たない武芸者もある。

雑多な時代の流れの中に、甚助も、一つの色だつた。誰も怪しみはしなかつた。この若冠な小修行者が、父の復讐を念じ、将来

の大志を抱いているとは誰も見なかつた。

四年経つて帰つて来た。

母の顔は、同じだった。

すぐ禰宜ねぎの山辺守人やまのべもりとが来た。家を立つ時と同じように、仏間に坐つて、母と守人の前に手をついた。

「御修行は積んだかの」

母が訊たずねた。

「四年だけのことは致して参りました」

「仇かたきの消息は」

「ほぼ知れました」

「どこで見届けました」

「母上が仰せられた通り、やはり京都に住んでいました。松永久秀殿の御内に潜ひそんでいるらしゅう思います」

「けんもん頭門に隠れていたのでは、近づく術すべもないと思うて、故郷へ帰つて来られたか」

「いいえ、坂上主膳へ出会うのは易やすいことです。けれども強豪主膳を討つことは、決してたやすくはございませぬ」

「まだ、腕に、確しかと自信はできぬとお云いか」

「敵に勝つにはまず、敵を知るにあると申します。坂上主膳は、その後、京都に遁のがれてからも、風評のよくない男ではありませんが、彼の武勇は、松永久秀が珍重して召抱えたのでも分ります。先さきつ年、久秀が室町の御館おやかたを襲おそうて、將軍義輝公を弑しいぎやく逆し奉つ

た折なども、坂上主膳の働きは、ぼうじやく傍若無人な戦ぶりと云われ
ております。いわゆる彼は悪人ながら、もがみけ最上家にいた頃から鳴つ
ている通り千軍万馬の士です。なんで甚助のような小冠者の細腕
にようこれをたお仆すことができましようか」

母は、子の言葉に、またたきもせぬ眼をして聞いていた。

守人は、

「ううむ。成人したのう。やはり旅の風は人の子に世を歩む道を
おし誠えてくれる」

と、云つて呻うめいた。

永祿十一年、彼が二十二歳の春だった。その二月中旬頃なかばから、五月末までの間、まる百カ日、彼は家に寝なかつた。また、帯おびを解とかなかつた。

林崎明神の神殿の辺りは、真昼、木洩れ陽こもがすこし映びす時の他ほかは、昼も暗かつた。守人もりとの住む社家の勝手元には、黄昏たそがれると、一碗かゆの粥かゆが出されてあつた。それが甚助の食事であつた。夜が明けると、また一碗、盆にのせて出されてある。

守人は、姿を見せない。努めて見せないことにしていた。勿論、母の榆葉にれはも、ここへは近ごんげんづかなかつた。

ここは今、熊野権現ごんげんの聖地であると共に、林崎甚助にとって、

生死を超ちようだつ脱だつした劍の道場だった。

彼は、百日の参さん籠ろうを誓願したのだった。

朝夕一碗ずつの粥かゆを守人から恵まれる他ほか、何も口にしなかつた。七日、二十七日は、まだまだ鋭気もあつたが五十日、六十日となると、肉は落ち、眼まなこは澄み、皮膚は垢あかを持ちながら蠟ろうのように白くのみあつた。

——喝かアつ。

——ええおうつ。

異様な声が、杉木立こだまに研こした。

月の晩も。風の昼も。

——えやーつツ。

神殿の広ひろ前に、彼は、三尺余もある長刀を、革紐かわひもで帯にくくし、われとわが影を、月の白い地上に睨にらんでいた。
 革紐の帯をなであげて、左手ゆんでが、鯉こいぐち口にふれる。右手めでが、軽く柄つかをうつ。

瞬間。

上体が折れる。満身の毛穴から、喉のどを破つて、声が発する。

一揮き、風を断たつ。

その時はもう、風か影か、空を一颯さつした大刀は、彼の腰間の鞞さやに吸われているのだった。肉眼では、その間かんの劍のうごきは、見て取れないくらい迅はやかった。

この行ぎようを、彼は、暁ぎようてん天から夕べまで、また、宵よいから深夜ま

で、一日何百回、行の熟達につれて、何千回もくり返して行つた。疲れれば、拜殿の破れ廂ひさしの下にある、一枚の蕙むしろの上に、身を横たえた。眠りから醒めると、すぐ大地に立つた。

日の出るたびに、傍かたわらの大杉の幹へ、一太刀、刀痕を入れた。

その刀痕の数が日の数であつた。

世上良師多し。
世せてん転ひ縹ひょう渺びょうの間かん

師縁求めて求め難し
如しかず直ただちに神しんに会わん

上泉伊勢守を訪ねて伊勢守に会わず、塚原土佐守を訪ねて土佐守に師事し得ず、その他ほか、当代著名の人、富田勢源、戸田一刀斎などの、高名を慕い、住居を追う間に、いつか四年の歳月を空しくした甚助は、翻ほんぜん然、

——直ちに神に会わん、

と、悟さとつたのであつた。

自然は皆みな師しだ。一冊の書物に師となることばがあれば、一木一草にも師となる声はあろう。そう考えて、彼は自嘲の一詩を旅の記に賦ふし、故郷ふるさとの産土神うぶすながみの前に額ぬかずき、嬰兒あかごにかえつたような心で、

「我みに、前人未踏みとうの劍の極理を授けたまえ」と、すがつた。

彼の誓願は、

「人の末流を汲まんより、われ自みら一流の祖かずかたらん」というにあつた。

諸国の剣人の実状を見、また、いよいよ剣磨けんまの時代の必然を、社会に視て来たからであつた。

勝敗は髪一すじである。

間まの遅いか速いかで勝敗はすでに決する。

剣のあつかい、間あい、心胆しんたんの工夫をした達人は尠すくなしとしない。

けれど、勝負に立つ、まず間髪の勝目を電瞬にとる工夫をした者はかつてない。

刀とうはすべて鞘にある。

刀が鞘を脱する時、勝負はすでにつきかけている。いや、勝目を掴つかむ機おりがあるはずである。

抜刀の法だ。練磨^{れんま}だ。

それを研究しよう。究めて神^{しん}に入り、そのの極理を掴^{つか}もう。
甚助の誓願にかかった端緒^{たんしょ}は、実にそこにあつた。

七

初め、木の皮も喰いたいような飢餓^{きが}に襲われた。それがやむと、時折、胃ぶくろが暴れて苦悶した。それに馴れると、妄念^{もうねん}が起つた。肉体の疲労が、自分の踏む足にもわかつた。そこを超える
と、自己が分らなくなつた。

五、六十日頃から、ようやく、

「苦行のかがあつたか」

と思われるように、頭脳は冴^さえ、心は清澄に、技^{わざ}もわれながら、見事になつて来た。

しかし、それは、技のみであつた。

「心は？」

と、訊ねてみると、空^{くう}漠^{ぼく}だつた。何も得てない気がした。

「これでいいのか」

迷い出した。一心不乱がみだれかけた。壁に突き当つたように技も進まない。われとわが身がふがいなくなつて死にたくさえなつた。

そこを超えて、

「何を」

と、魔とも人とも思われぬ形ぎようそう相さうになつた頃、大杉の幹の刀痕は、九十を超えていた。

「もう百日」

とも思わなかつた。甚助は発狂していたかも知れないのである。一刀、一刀、また一刀、空くうを斬きつては鞆さやにおさめる時の凄すさまじい彼の気合は、もうしや噎がれ果はつて、何ものか世にあり得ない野獸の咳しわぶき声こゑのようだつた。喉のどはやぶれ手足は血によごれていた。百日も櫛くしを入れない髪には落葉の骨がたかつていた。雨露にまみれた袴はかま、小袖、それも傷ましく綻ほころび果はつていて。そこからかなり距へだてている甚助の家へまで、近頃は、夜になると、最上川の水音よ

り明らかに、彼の狂わしいしや嘎れ声が響いて行つた。榆葉は、共に寝なかつた。

いや遂には、

「百日の間は顔を見せぬ」

と、子へも、守人へも、固く約した事も制しきれなくなつて、守人の家まで忍んで来ていた。しかし、守人は、

「今あなたが、甘い涙などそそいだら、あなたは何のために、甚助どのを、あそこまで、きつい心で育てて来たか、意味のないことになりましょう」

と、窓を閉じて、固く一室に止めた。

それでも彼女は、破れ戸の隙間から、時折、彼方を窺つたり、

耳をすましたり、悶もだえていたが、そのうちに、何思つたか社家の裏から馳け出して、最上川の畔ほとりに、衣をぬぎ捨て、月よりも白い肌、烏羽玉うばたまより黒い黒髪を、怯ひるみもなく、川水に浸ひたし、また川水を一心に浴びて、そこから見える神居かみいの森へ、夜もすがら、掌てのひらをあわせていた。

まだ五月の末だつたので、川水は冷たかつた。溪谷の奥ふかくには雪さえ残っている頃である。彼女は、凍こごえたまま、仆たおれていった。夜の白んだのも知らなかつた。

同じように。

その夜明け頃。

甚助も、大刀を持ったまま、熊野権現の前に、平べつたくなつ

ていた。完全に呼吸もしていなかった。肌も、死人のような色をしていた。

陽がさし昇った。

巨杉おおすぎの梢から金色の雫しずくが、甚助の背へほとほと落ちた。美しい毛艶しんあの神鴉しんあが、ふた声ほど、高く啼ないた。

「甚助どのの母御が、最上川の水に浸って、気を失うてござらつしやる」

河往来かわおうらいの船子たちが知らせて来た。それはちようど、朝あの粥かゆを炊たいて、守人が、神殿の前に仆たれている甚助の姿に気づき、驚いて、手当をしていた時だった。

幸いに、二人とも、蘇生そせいした。元より母の榆葉にれはのほうほうが恢復かいふく

は早かった。榆葉は気がつくつと、寢食も忘れて、子の枕元に坐つたきりだった。

甚助も日ならずして恢復した。

床を払つて起きた日に、彼は、身の垢をそそぎ、衣服を更えて、

「母上、一緒に行つて下さい」

と、云つた。

「どこへ」

「神前へ、お礼詣りにです」

榆葉は頷いた。そして心密かに、わが子が百日の参籠とあの精

進の結果、何ものか神靈の示顯を得て、志す劍の工夫のうえに、

一つの光明を掴み得たにちがいないと思つた。

「守人様、神灯しをお願いいたします」

社家へ声をかけると、守人も来て、神前に菅菘を展べ、母子の坐つた端へ、自分も共に坐つて、拍手をうち鳴らした。

「……………」

祈念をこめて、神へ心から額ずき終つて後、楡葉は甚助へ問うた。

「何ぞ、神さまの、御霊現をうけたかや」

「いいえ、べつに」

「百日のあいだに、何もなかつたかの」

「八、九十日から先は、一切夢中でございました。何も覚えませぬ。精も力も尽き、昏々と仆れて夢中の霧につつまれたように

氣を失つたのが、ちようど百日目のあけがた暁方でございました」

「それだけか」

「それだけです」

母はやや失望の色をう泛かべた。けれど甚助の胸には、口で言い現し難い何ものかが実は宿っていた。けれどそれを説明する言葉がなかった。

「行つて参ります。——母上、もう一度お暇を下さい。こんどは、坂上主膳へ出會つて参ります」

数日の後、彼はふたたび、旅へ立った。腰ようかん間の一水は、伝家の銘刀ちのぶく来信国の三尺二寸という大劍であつたという。

京都へ上るその途中だった。やがて木曾路へも近い一夜、信州岩村田の土豪北山半左衛門の家に泊った。

「お客様、逃げて下さい。はやく、はやくたいへんです」

まよなか
真夜半のことなのだ。

あるじ
主の子息北山半三郎が寢室へ来て、甚助をゆり起し、おのの顛きながら云うのだった。

「——いばらぐみ茨組がやって来ました。木曾の宿々から善光寺いったいを荒して廻る茨組です。家財や金さえさら攫つてゆけば立去るでしょうが、お怪我があるといけませんから」

茨組という名は、街道いたる所で甚助も聞いていた。応仁の乱以後、室町幕府の紊ぶんらん乱につけこんで、京都に簇そうしゅつ出した浪人くずれの無頼者ならずものの一団である。

しかし、その京都や浪華なにわでも、近頃は取締りが厳しくなつた。近畿や地方の都会でも、信長とか、朝倉家とか、徳川家などの武將が、自己の領政に厳密な改正を加えている折なので、浮浪人や暴徒の横行する世間はだんだん狭められていた。

で、自然、武將の勢力や統治の行き届かない片田舎へと、茨組いばらなども流れて来た。同時に彼等の持前とする殺戮さつりくと兇暴な質たちも、野に返つた野獣と同じで、とても人間の仕業しわざとは解し得ないことを平然とやって歩いた。

「お静かになさい。騒ぐことはありません」

甚助は、信国のぶくにの一腰を横たえて、裏戸を開け、塙かきを躍おどつて、

表の土堀門のほうへ迫つて行つた。

信濃の名物という月がその晩も煌こうとして中天にあつた。外から

窺つてみると、大槌おおづちや棍棒こんぼうで打ち壊したらしい門内へ、およ

そ三十人ばかりの賊がなだれ込んで、土蔵を破壊し、全家族を縛くく

し上げ、手燭を持ち廻つて、大がかりな掠奪りやくだつにかかっている

様子であつた。

どんな人間どもかというのと、その頃の世相を見て書いた「室むろま

町殿物語」に依ると、茨組いばらの風俗をこんなふうに写してある。

ソノ装束ハト見レバ、茜アカネゾメ染ノ下帯、小玉打コダマウチノ上帯ナド、

幾重ニモマハシ、三尺八寸ノ朱^{シユザヤ}鞆ノ刀、柄ハ一尺八寸ニ卷カセ、ベツニ二尺一寸ノ打刀モ同ジ拵ヘニテ仕立テ、ソギタテ^{ヤリ}鑓、搔持^{カイモ}テルモアリ、髪ハ摺ミ乱シテ、荒繩ノ鉢卷ナドムズト締め、熊手^{マサカリ}鉞ナド前後ヲカタメ、常ニ同行二十人バカリニテ押通ルヲ、「アレコソ、当時世ニ聞ユル茨組ゾ。辺リヘ寄ルナ、物言フナ」トテ人々怯^ヲチ怖レテ道ヲヒラキケル。

悪党でも派手を誇る時代だったから、それは洛内の見聞であつたろうが、いずれはそんな部類の雑多な^{ふんそう}扮装をしていたにちがいない。それと武器は流行の^{はやり}長柄が最も多く、槍、山刀、^{まさかり}鉞、槌なども持ち歩いていたらしく思える。

やがて屋内の悲鳴や物音が少しやむと、その^{せきぼく}寂寞の中から、

三人、四人と外へ出て来た。目ぼしい家財を担いで来るものもあり、金や女を盗んで戯れながら、出て来る男もあつた。

甚助は、ふいに、前へ立つて、

「待てつ」

と、云つた。

待て——と聞えた時はもう、彼の太剣の左右に、二つの死骸が一度に薙ぎ仆されていた。仰天して逃げ込もうとした男も一名は後ろ袈裟けさに、一名は腰ぐるまを払われて、醜い胴を地へ転がした。

刀を拭ぬぐつて、また待つた。

次の三人も、一颯さつに斬つた。

甚助は、心で、

(母上。これです)

と、叫びたかつた。

林崎明神の神前に額ぬかずいて、母から、百日の参籠と精進のうちに、

何か、神の御靈現みさとしはなかつたかと問われた時、云い現わすべき言

葉がないので、

(べつに、何も覚えませぬ)

と答えたが、その云い現わせないものを、彼は今、紛まぎれない事

実の上に、また、無意識な行動の上に、間違まちがいなく自己の相すがたとし

て、現まわしていることを思つたのであつた。

「何だ？」

「どうしたと？」

門外の異変に気がついて、茨組いばらの総勢一かたまりとなつて、やがて甚助の前後へ、真つ黒に躍りかかつて来た。

信のぶ国くにの刀は、月下に十数箇の死骸を積み、大地を碧あおい血に光らせた。

かなわじと余の者は怖れて逃げたが、その騒動も片づいて、翌日、北山家を辞し去つた彼を、道に待っていたらしいその夜の茨組の男三名が、

「しばらく」

と、並木の蔭から呼びとめた。

呼び止めた男は、茨組の沼沢甚右衛門、葦沢弥兵衛、桜場隼人などだった。見れば大地へ姿を揃えて平伏している。そして誠意を示して云うのだった。

「御門下の端に加えていただきたい。——とお縋り申すからには、今日以後、悪行を止めて完き武士となるよう志すことを、三名、神に誓い申しての上でござる」

甚助は、乞を許した。しかし、誓約に止めて後日の再会を約し、なお行くと、また彼を追って来た者がある。岩村田の近郷に住む田宮平兵衛という郷士だった。

「願わくば拙者をお弟子として伴れ給え」

切実な願いなので、田宮だけは供にした。やがて京都へ着いた。そしてあらゆる苦心と手引を経て、松永久秀の幕下ぼっかにいる父の讐し敵ゆうてき 坂上主膳と出会うことができた。

主膳を斬った際も、信国の鏢つばが、彼の手に鳴ったせつな、実にただ一刀しか費ついやされなかつたということである。唯、遺憾ながらその場所や、当時の実状など、史録には明確を欠いている。

居合いあいという言葉は、後世にできた称よび方であろう。彼の創始した抜刀法——後に称とえたところの林崎夢想流むせうりゆうとは、純正剣道の一流であつて、本流の剣に、剣とは不可分な抜刀の神息をふきこんだものに他ほかならないのである。

彼に隨身した田宮平兵衛は、後に、

——柄つかに八寸の徳、みこしに三重じゆうの利。

という有名な居合の名標語を吐いた人で、抜刀田宮一流の別派を興し、当時の達人ともいわれて、林崎夢想流きか麾下の第一人者と目されるに至った。

また、茨組いばらから脱した沼沢甚右衛門は、常陸ひたちの真壁まかべに、葦沢弥兵衛は武州牛久在うしくざいに、桜場隼人さくらばはやとは三州拳母村こころもに、それぞれ一道場を持つて大いに道風を興したとある。

なお、林崎甚助自身は、各地を遊歴して、自然、門流のひろまる一方、後年またさらに、鹿島神宮の武林ぶりんに入つて、天真神道流の研鑽けんさんに身をゆだね、元龜何年かには、越後の上杉謙信の幕將ぼつご、松田尾張守に隨身して、戦場をも馳駆したらしいが、謙信の歿後

は、杳^{よう}として、その足蹟も定かでない。

晩年は奈良に住んでいたという説もあるし、鹿島で終つたという説もある。五十何歳かで郷里林崎で病歿したともいわれている。いずれにしろ半生は確説もない。しかし、彼の林崎夢想流は、不滅の光茫^{こうぼう}を遺^{のこ}して行つたし、その誕生の森、林崎明神は今もそのまま現存している。

夢想と流名に称^とえても、彼の百日參籠^{さんろう}には、何らの奇蹟的なはなしも伝えられなかつた。けれど奇蹟のないところに、彼の眞実な魂の神化があつた。肉体を百日の精進に燃えきらして仆れるまでに至れば、ひとり林崎甚助重信^{しげのぶ}のたましいばかりか、誰の精神でも、どんな道に於ても、神の夢想をつかむことができよう。

「甚助。ようしやった」

彼の母は、京都から一先ず帰郷した甚助を迎えて、初めて、心ほころから綻んだ笑顔えを子へも見せたろうと思われる。

「生涯の満足は今だ」

母の一笑に、甚助もまた、そう思ったにちがいない。だが、若くして美しかった榆葉にれはは、亡夫の讐しゅうえん怨えんを子の討ちはらしてくれた報告を聞いてから幾いくとせ年もなく、病の床について世を去った。甚助重信が、孤劍、白雲の人となって、郷土を離れたのは、そのためであると云われている。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「講談倶楽部 一月号」大日本雄弁会講談社

1940（昭和15）年1月

※初出時の表題は「日本剣人伝（一）林崎甚助」です。

入力：川山隆

校正：岡村和彦

2014年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

剣の四君子

林崎甚助

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>